

あり

『玻璃』 真鍋美恵子

月光が照らし出している街といえど誰も静かな情景を思い浮かべる。美恵子はその静けさを「暴力の過ぎたるとき鮮しさ」と表現している。静と動の二面で物事をとらえた鋭い感覚の歌である。

くろくろと裂けし谷間の夜のふかき照りてとどかぬ  
月渡りつつ 『うたのゆくへ』 斎藤史

戦後の信州の生活の中で歌われた作。どんなに明るい月も決して照らし出すことのできない黒々と裂けた「谷間の夜のふかき」。それはそのまま史の心の「夜のふかき」であり、今日でもまだ解明されてないだろう。

月すでに上るときけり淡淡と照れるを思ひ眼をとぎす  
『一茎の草』 佐佐木由幾

月光の歌と言えば、天上に輝いている月か、その月に照らし出されている地上の風景の歌がふつうである。だが、この歌は違う。天上の月の「淡淡と」照っているのをあえて眼をつぶって見ずに、心のなかで月の光を思うがままに想像している。最上の月が心中にあるのだ。

月光の貨車左右より奔り来つ 決然として相触るる  
なし 『星餐図』 塚本邦雄

「奔」の字は勢いをもつて走るといふ意味。「奔り来つ」の「つ」が太く響くと同時に、「来つ」の「キツ」の音は「決然」の「ケツ」を導き、つながる。月光に照らし出されている黒い貨車同士は触れあうごとく擦れ違っても「相触るる」ことはない。それも「決然と」。

いつかどこかで取り落したる愛憎も恋の香のする桜  
月夜や 『みどりなりけり』 築地正子

「桜月夜」は与謝野晶子の造語という。その晶子の「清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき」が若い女性の清らかな桜月夜であるなら、正子の桜月夜は人生の「愛憎」をとことん味わった人の妖しい美しさの桜月夜である。眼目は第四句だ。

月白く窓にのぼりてこの世にはほのくれなぬのみど  
りご眠る 『一脚の椅子』 竹山広

「ほのくれなぬ」の語が美しい。みどりごの顔、とくに頬のあたりかも知れない。場面としてはみどりごが眠ったあと窓の外を見たら月が上っていたということだろう。月とみどりごは取り合わせとしてよく合う。

月読つきよみのひかりおぼろに音もなく雪ふりつもる涅槃な  
るべし 『大空の干瀬』 前登志夫

「月読」は月の神もしくは月を指す。月の光があつて、雪が降りつもっているという幻想的で至上の光景である。「涅槃なるべし」と言われているのはどこか。吉野に棲み続けた登志夫の「心のなかの吉野」ではあるまいか。

月下独酌一杯一杯復また一杯はるけき李白相期あひまさんかな  
『直立せよ一行の詩』 佐佐木幸綱

月の歌の最後は酒の登場する歌。酒を飲むと、心は時空を自由にやすやすと超える。「独酌」しつつ、いつの間にか李白と酌み交し、月読と酌み交している。若山牧水も独酌を大いに好んだ。